虹の松原の未来を考える

新開秀貴

Teens KARATSU ♦ C班

「松葉」に目を向ける

近年、国・県・市・市民団体等が連携して、虹の松原の保全活動に取り組み始めています。

現在、虹の松原は燃料事情の転換とともに、松葉かきが行われなくなり、それにより松葉が処理されない状態が長く続き、松葉が腐り、松原の土壌が富栄養化の状態になっています。松の木は栄養が多い土壌を好まず、松の木が枯れたり、広葉樹の進入が多く見られるようになりました。これにより、日本全体が唐津の宝である虹の松原の保全・再生活動に取り組み始めたのです。保全には「松葉かきが一番！」ということで市は、年に3回、松葉かきを行っています。そこで220ヘクタールにもなる広大な虹の松原から出る大量の松葉をどうするかに、私は目を向けてみました。

松葉かきをした後の白砂

現在の松葉の利用法

松葉を利用するといっても虹の松原の松葉はとても利用しにくい理由があります。

一つは、松葉の性質に問題があります。松葉は松ヤニが多く出るためよく燃えますが、使った後の道具にたくさんヤニがつくため、メンテナンスにとても手間や費用がかかります。

二つ目は、虹の松原は国が管理しているため、落ちた松葉や黒松から採れる松露も虹の松原の副産物であるので、松葉を利用しようとすると国に許可をもらったり、佐賀森林監理署と話し合わなければならないなど、面倒な手続きが必要です。

現在、地元のボランティア団体や小学校、唐津南高等学校などが松葉かきを行い、集めた松葉を専用の袋に入れておくと、自動的に唐津のタバコ組合が持って行ってくれる仕組みになっています。タバコ組合は国と契約して松葉を買い取り、タバコ栽培の温床や堆肥に利用しています。しかし、きちんと肥料として使うには、さらに3年の時が必要です。

私は唐津南高等学校の虹の松原保全活動チーム「松露プロジェクト」に入っていますが、その活動のひとつに松葉の有効利用についての研究があります。昨年から松葉を「炭」にしたものを使って校舎の屋上に芝を敷く、「屋上緑化」にメンバー全員で取り組んでいます。真砂土、バーク（樹皮）、パーライトなどを混ぜた良質な土壌の中に、虹の松原で採ったコケや炭にした松葉を混合したものを使っています。芝の生育は順調で芝色もよく、とても活き活きとした芝が生えてきています。さらに屋上緑化によって、夏場の教室の温度が低くなるという効果もあり、学校の生徒にもとても喜ばれています。この取り組みは、学校にとっても虹の松原にとっても、とてもよいことだと私は考えています。

黒松の根元に生える松露

黒松の根元に生える、松露饅頭のモデルとなっている松露は、黒松が吸い上げた水分を松露がもらい、松露がつくりだした養分を黒松がもらって生長するという互いに助け合いの関係、「共生関係」にあります。大事なのは片方だけがよくなるのではなく、お互いにとってよいことをする「共生関係」が一番大事だと私は思います。

黒松を植林した「みなと松原」

唐津南高等学校校舎の松葉を使った屋上緑化

松葉かきの作業をする子どもたち

松原の未来をみんなで想像する

今、佐賀県が市とボランティア団体と協力して、2004年から大島地区の唐津港の大規模な緑地計画を行っています。唐津城から唐津港までの土地を黒松で緑にしていく「みなと松原計画」を、ボランティア団体「みなと松原の会」が計画しています。年に1回、地元の人たちが黒松を植林する「植林祭」が今までに4回行われ、港付近の植林はほとんど終わっていますが、現在稼働していない火力発電所がなくなれば、そこにも黒松を植えようという大規模な松原計画です。

唐津城は別名「舞鶴城」と呼ばれています。その由来は唐津城を中心に西の浜と東の浜があることを、鶴が翼をひろげているようだという理由で名付けられました。「東の浜には虹の松原があり、きれいに羽ばたいて見えるから、西の浜にも松原ができれば立派な鶴ができるじゃないか！」というとても素敵な計画です。2006年から地元の人たちが黒松を植える「植林祭」も年に1回行われています。

20年後、私たちの住む唐津市は、今以上に松原が広がっており、市民と松原のつながりもさらに近いものになっているのではないでしょうか。

虹の松原の三大銘菓

野﨑雷太

Teens KARATSU ♦ C班

「松露饅頭」の歴史

松の木にちなんだ唐津の三大銘菓である「松露饅頭」「松原おこし」「松の緑」を紹介します。

「松露饅頭」は文字通り、松露の形をした饅頭です。松露は近年ほとんど見ることが難しくなりましたが、本来は虹の松原に毎年春と秋にできるキノコの名前です。味はほとんど感じられませんが、さわやかな香りと風味が特徴です。「松露饅頭」は中身に黒あんが入っていて、それをうすい皮で包んだ小さなお菓子です。中身のとても甘いあんことさわやかな味がする皮との相性がよく、まろやかな味が楽しめます。読者の皆さん、ぜひ唐津に食べにきてください。

ところで、私は「松露饅頭」を詳しく調べるために、宮田屋を訪問しました。宮田屋の「松露饅頭」は、180年前の江戸時代後期から販売しているそうです。「松露饅頭のおいしさの秘訣は何ですか」とたずねると、宮田正英さんは「焼き方にコツがある」と言っていました。その詳細は企業秘密だそうです。しかも唐津のお菓子の中では一番の売れ行きで、1年で何10万個も作っているそうです。宮田さんのお話によると中国に昔からあるお菓子である「唐饅頭」を参考に「松露饅頭」を作ったそうです。

私はひとつ面白いことを見つけました。それは「松露饅頭」のあんこについてです。さきほどから話しているように中身は黒あんです。しかし本当の松露を半分に割ると中身は白色です。なぜあんこの中身の色は松露の白色じゃないのでしょうか。白いあんこの「松露饅頭」を提案したいです。

春と秋に松の根元にできる松露

「松原おこし」と「松の緑」

「松原おこし」は「松露饅頭」の次に有名なお菓子です。これは精選された米をヤマモモの皮で色を付けて天日で乾燥させて炒り、さらに水飴と混ぜ、黒糖をまぶし、板で細長く伸ばし、適当な長さに切ったものです。「松原おこし」は「家をおこし名をおこす」という縁起がいい意味があります。おこしの粒々には松の花という意味があり、それを棒状に固めたものを松の木にたとえ、それを山のように重ねて鏡山にたとえています。鏡山は虹の松原全体を眺めることのできる山です。黒糖は虹の松原の黒松をモチーフにして使っています。

3つめは「松の緑」です。しかし現在は「若緑」と呼ばれています。その理由は、「松の緑」の商標登録をされた方が亡くなったため、別な方が「若緑」として商品化したそうです。「松の緑」は松が新芽を吹いたときをイメージして作っているそうです。しかしまだあまり知られていません。とても美味しいので、ぜひ皆さんに食べてもらいたいです。

20年後の唐津のお菓子

20年先には、「白砂青松」が復活していると思いますので、その際多く収穫できる松露を利用したお菓子や食品の考えについていろいろな方に質問しました。もし、再び「白砂青松」が復活すればということで、宮田さんから2つの答えが返ってきました。ひとつは松露を利用して唐津だけにしかない特徴のあるお菓子を作りたい。特に松露の香りのよさを利用して、ロールケーキを作りたい。もうひとつは、炊き込みご飯にも松露を使いたいとのことでした。唐津シーサイドホテルの高倉秀吉さんは、松露のお吸い物と松の葉を使った燻製を提案してくれました。

三大銘菓はどれも松にちなんで作られたものですから、まずは虹の松原が有名にならないといけないと誰もが言います。三大銘菓にはそれぞれ魅力がありますが、PRが足りません。また四大銘菓と呼ばれるように、もうひとつの銘菓を唐津市民全員で作り上げていきたいです。

最後に私が美味しいと思う「からつバーガー」について紹介します。このからつバーガーは虹の松原の中ほどにある駐車場に止めた大きな車を店にして、40年も営業しているそうです。そして魅力は手軽で美味しい点と、松原という大自然の中で食べることができるところです。しかも車のナンバーを教えると駐車場まで届けてくれます。平日は300個以上作っているそうです。そして20年後の夢は、全国展開だそうです。

私は三大銘菓のよさを知り合いや友だちに伝えていき、それが全国に広がり、日本と世界で通用するようにPRしていきたいです。

松原おこし作りに挑戦

「若緑」の名称で売られている松の緑

宮田屋の松露饅頭

虹の松原に駐車している「からつバーガー」の車

松原おこし

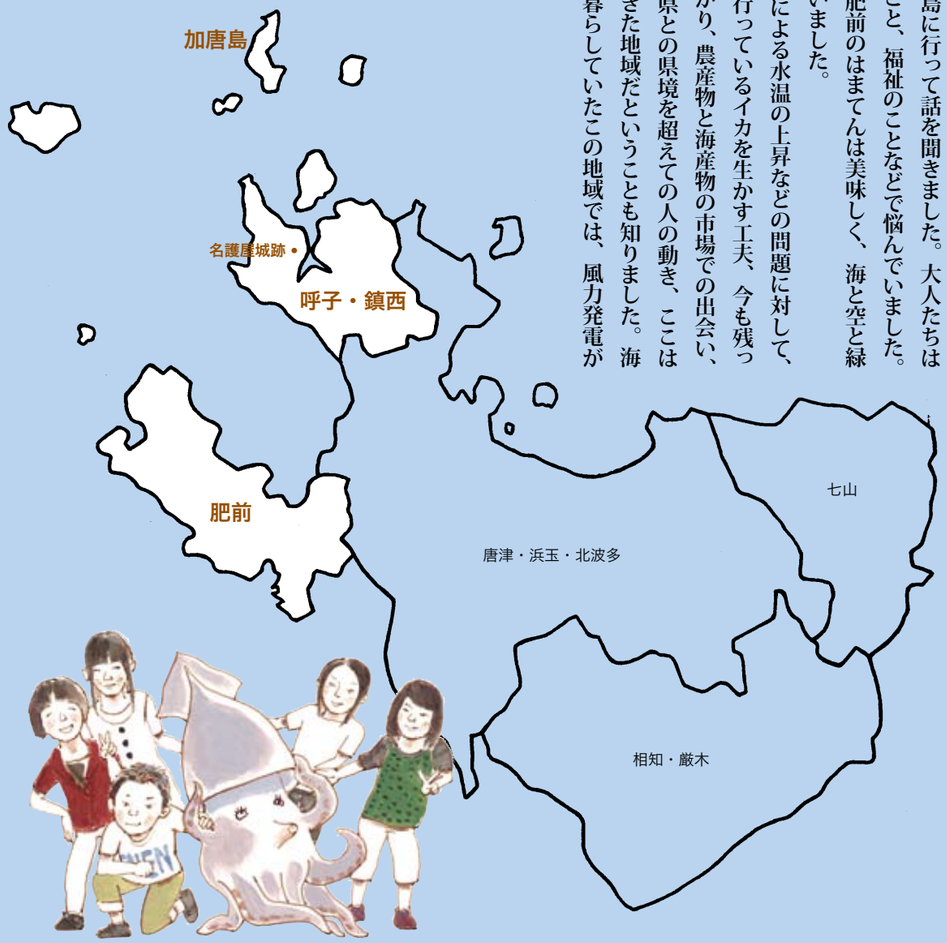
海のまち

Teens KARATSU ♣ **D**班

呼子町・鎮西町・肥前町は２００５年に合併して、唐津市となりました。本来、都市計画マスタープランは「都市計画地域」を対象としますが、唐津市では市全体を一体で考えるために、呼子・鎮西・肥前に対しても都市計画マスタープランがつくられています。

中高生たちは、町や島に行って話を聞きました。大人たちは高齢化のこと、仕事のこと、福祉のことなどで悩んでいました。でも、呼子の活イカや肥前のはまてんは美味しく、海と空と緑は眩しいまでに輝いていました。

燃油の高騰や温暖化による水温の上昇などの問題に対して、汗をかきながら漁師が行っているイカを生かす工夫、今も残っているくじら組のつながり、農産物と海産物の市場での出会い、鷹島肥前大橋での長崎県との県境を超えての人の動き、ここは古代から国境を超えてきた地域だということも知りました。海と山と風と人が仲よく暮らしていたこの地域では、風力発電が盛んに行われています。



取材で出会った人びと Ⓒ班

瀬戸恵司さん●海浜館専務
西欧人の観光客が訪れていた頃の魅力的な写真を見せてもらいました。

藤田和歌子さん●NPO 法人唐津環境防災推進機構 KANNE 事務局長
虹の松原を保全する市民活動について教えてもらいました。

脇山忠さん●脇山忠商店
虹の松原の昭和時代について、詳しく教えてくれました。

宮田正英さん●宮田の松露饅頭代表
松露饅頭についていろいろと教えてもらいました。イケメンでした(笑)。

高倉秀吉さん
●唐津シーサイドホテル総支配人
虹の松原の歴史を教えてもらったり、昔の写真を見せてもらいました。

麻生節子さん●麻生本家
取材でお世話になった人の中で、一番虹の松原を愛している人でした。

未来に残したい唐津の風景 ④

見事な石積みの名護屋城跡、肥前町から眺める海の絶景とシラス干し。
漁船、イカ干し、朝市でにぎわう呼子。
小さな島々に暮らす人びとに想いを巡らして、
人と物資を載せた定期船が海上を行き交う。

呼子改造プロジェクト

栗山友里

Teens KARATSU♣D班

呼子朝市の心

石川県の輪島、岐阜県の高山、そして佐賀県の呼子、この3つを合わせて「日本三大朝市」と言います。呼子朝市の原美千代さんに「呼子の朝市は他県とはどこが違うか」と質問したら「他の県に比べて手作り品が多く、あたたかみがある」ということでした。私も確かに呼子朝市にはあたたかみがあると感じました。売り手のおばちゃんは挨拶を返されようが返されまいが、とにかく元気よく挨拶をされる姿が印象に残っています。

また、朝市の人が抱えている問題も知りました。それは、若い人が少なくなってきたということです。原さんは店をもち始めて20年以上経つらしいのですが、「どんどん若い人の数が減ってきていて、そのための対策を考えることが、これからの課題」と話してくれました。

大事なものって？

呼子朝市には約80年の歴史があります。海側に住んでいる人たちの鯨や魚と、山側に住んでいる人たちの野菜や甘夏みかんを「物々交換」したのが始まりと言われています。次第に朝市と商店街がつながりをもつようになり、いろいろなものを売って、お金をもらう形が主になりました。このことを聞いて、今も物々交換し続けていてほしかったと思いました。自分が交換するものを持ってさえいれば、お金を使わなくてもほしいものが手に入るのは便利だと思います。私は物々交換やそのつながりが、もうちょっと残っていてほしかったと思いました。

呼子には高齢化の問題があります。でも、問題だけではなく、もちろんいいこともあります。それは、呼子全体の雰囲気がいいことや年輩の方たちがからこそだせる、あたたかいぬくもりがあることです。呼子や朝市には不便なところもあるけど、人のあたたかい心という一番大事なものがあると感じました。これからも、あたたかさ・ぬくもりなどは大事に守っていくべきだと思います。

こういう店をオシャレなカフェにしたい

呼子は階段の多い町

道ばたでは、朝獲れた魚が売られている

▲朝市通り商店街の入口
◀干物の下で寝ている猫。
気にせず元気なおばあちゃん

友だちを連れて行きたくなる呼子に！

私の希望は、たくさんあります。

一つ目は、呼子に近いところの名産品「唐津の松露饅頭」や「肥前の岩ガキ」などを呼子の朝市へぜひ持ってきてほしいということです。

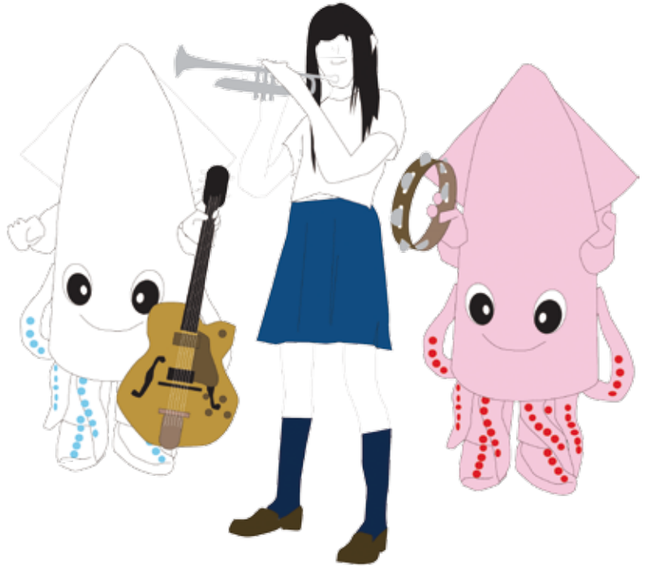
二つ目は、呼子の朝市に若い人をたくさん連れて行きたいです。だから呼子朝市全部をあげてのイベントを開いてほしいです。海をバックに音楽ライブをしたり、呼子のイメージキャラクターのケンちゃん・サキちゃんをもっと活用していきたいです。

また歴史的な町並みの中の使われていない建物を活かして、古く見えて実は中身は喫茶店をやっているようなギャップのある店をつくってほしいです。ギャップってなにかと面白いので絶対若い人も、もっともっと食いついてきてくれると思います。「また呼子に行きたいな、友だちにここを紹介したいな」と思う人が増えればもっと訪れる人も増えると思います。

さらに呼子の朝市は組合に２００円払うだけで、お店を開くことができるそうです。だからもっと若い人たちにお店を出してほしいと思いました。私だったらちょっとした楽器店などをつくってほしいです。また音楽をやっている人たちは、組合から借りた場所を使って演奏し、演奏している前で自分たちのＣＤを売るっていうのも手だと思います。朝市には昼までたくさんの人が行きかっています。もしＣＤを１枚１００円で売ったとしても２人買ってくれればそれで場所代が払えるので、演奏する場所に困っている人や自分の演奏を聞いてほしいという人にはもってこいだと思います。

最後に私の一番の希望は、朝市の路面に絵を描いてほしいということです。道の色を変えるだけでも印象が変わりますよね？　私は誰もが楽しんで、また歩きたくなるような道にしてほしいと思います。そのために、子どもが歩きたくなるおしゃれな道を希望します。私もまだガキなのでよくやってしまいますが、子どもってタイルの色が違うところを飛んで歩きますよね。そこで、道の一部だけ色を変えたりして、子どもが歩きたくなるような道にしてほしいです。また呼子の町並みにあうレトロな雰囲気にして、大人の人にとっても歩きたくなるような道にしてほしいです。

20年後どうなっているかわからないけれど、呼子が今よりも活気のある、若い人も年輩の方も一緒になって頑張る呼子であってほしいです。



ケンちゃん、サキちゃんとストリートライブ

海のまちで見つけたもの

山下未裕

Teens KARATSU♣D班

今回、呼子・鎮西・肥前、また唐津市全体でたくさんの場所を訪れました。また、たくさんの人たちと会いました。それを写真で少しだけ皆さんにも紹介します。

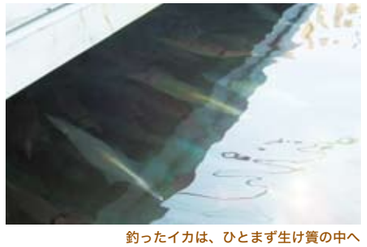
みなさん、自分の家族が20年前何をしていたか知っていますか。私のおじいちゃんは漁師だったのですが、私はおじいちゃんがなんの漁師さんだったのか知りませんでした。

皆さんも、近くにいる人が20年前何をしていたのか、聞いてみてください。少しだけお得な感じになれるかもしれません。

さっきまで泳いでいたイカが、豪快にさばかれる

イカ漁師の船。「イカ以外にもマグロやブリの１本釣りもします」と漁師の水口さん

料理される前のイカ。まだ生きていて、ピンピン跳ねる



釣ったイカは、ひとまず生け簀の中へ

岩ガキの種付け作業をする肥前町の岩本さん夫妻

何時間も立ちっぱなしで、干物づくりをするおばちゃんたち

ホタテ貝の殻に着床させたカキの稚貝

ケンちゃん、サキちゃんと「ハイ、キムチ！」

網でくるんで海に入れ、カキが育つのを待つ

▲魚をすりつぶした「はまてん」の素▶油で揚げれば「はまてん」のできあがり。ショウガ醤油で食べてもいい

朝鮮半島との交流

吉村早織

Teens KARATSU♣D班

古代の唐津と朝鮮

唐津市では朝鮮との交流が、古代からあります。特に百済の王様である武寧王が加唐島で生まれたことは有名です。加唐島には武寧王が生まれた記念碑もあり、産湯に使われた井戸も残っています。1971年、韓国公州市で武寧王陵が発掘調査され、墓誌石が発見されました。それによると、武寧王が生まれたのは461年で、『日本書紀』の筑紫の各羅島（鎮西町の加唐島）で生まれた年と一致します。

皆さんは、松浦地方に伝わる「日本三大悲恋物語」のひとつ「佐用姫伝説」を知っていますか。古代、百済に渡るという命令を朝廷から下された青年武将・大伴狭手彦は、停泊地の松浦町の土地の長者の娘・佐用姫と恋に落ちます。しかし出航の日がきてしまい、佐用姫は悲しみに耐えかねて鏡山に登り、軍船に向かって振ると願いが叶うといわれる領巾を振りました。それでも名残はつきず、山から飛び降り、呼子町の加部島まで追いすがったものの、すでに軍船の姿はなく、七日七晩泣き続け、ついに石に化してしまった、という物語です。

その頃百済は、新羅や高句麗と戦争をしていました。日本と仲がよかった百済は、たびたび日本に兵隊を送ってほしいと頼み、そのお礼として日本は技術者を得ました。その後676年に朝鮮を支配したのは新羅で、新羅に敗れた高句麗と百済の王様の子孫は、日本に逃げて来ました。

このように、古代から朝鮮と日本（当時は倭の国）そして唐津は、交流がありました。

加唐島にある武寧王誕生の地の石碑

佐用姫（イラスト／吉村早織）

名護屋城と朝鮮出兵

1592年と97年、豊臣秀吉は2度に渡って朝鮮へ出兵し、朝鮮半島を手に入れようとしました（文禄の役、慶長の役）。秀吉は日本では馴染み深い武将ですが、韓国では残虐な「壬辰・丁酉倭乱」を命じた侵略者と認識されています。この2つの乱は、古くから交流してきた日本列島と朝鮮半島の人びととの関係を一時断絶させた、不幸な出来事でした。

名護屋城は、秀吉が朝鮮出兵のための陣地として、鎮西町名護屋に建てられました。総面積は17万平方キロと、当時では大阪城に次ぐ規模でした。海との間には大きな城下町がつくられ、城の周囲には120以上の全国の大名たちの陣屋が築かれ、10数万もの人びとが居住した大都市でした。

秀吉が鎮西を選んだ理由は、5つあります。1つ目はむろん、朝鮮に近いこと。2つ目は、小さい山などがたくさんあり、資源が豊富だから。3つ目は、あまり開拓されていなかったから。4つ目は、名護屋城の近くに港があったから。この港（名護屋港）は水深が深く、大きな船も停めることができます。5つ目は、博多に近いこと。当時、出兵する兵士たちは博多に集められました。だから、近くて便利でした。

名護屋城は、入口から天守閣までが1本道のようになっていて、周りの陣の入口がすべて天守閣に向けて建てあり、防御機能を施した小型の城でした。名護屋城はただ秀吉が住むだけの城となっていたようです。

出兵を命令された人たちは、誰もが乗り気だったようには思えません。実際、梅北国兼という人は、反乱を起こしました。しかし、すぐに秀吉によって収められてしまいます。そして妻は見せしめに火あぶりにして殺されました。この効果で、他の武将は反乱を諦めたそうです。

秀吉は1592年（天正20）の4月下旬に、名護屋の陣地に到着し、海を渡る準備を始め、その翌日、約16万人の軍を釜山に送ります。文禄の役の開戦です。最初は優勢で、開戦後20日で漢の城へと到着しました。しかし、明の援軍や朝鮮水軍の攻撃、民衆が反乱を起こしたので劣勢となり、1596年（文禄5）停戦しました。

同年、秀吉は明との和議交渉が決裂して、再び朝鮮へ出兵しました。これが慶長の役です。この1年後に秀吉が病死すると、朝鮮にいた軍はすべて日本に引き上げました。

今も続いている交流

現在、名護屋小学校の小学生は、韓国の小学生と交流しているそうです。また、名護屋城では毎週火曜日に韓国語講座が開かれています。昔の戦争にかかわらず、今も仲よく交流できるのは、すごいことだし、いいことだと思います。

私は、父に佐用姫伝説を聞いた頃から、ほんの少し歴史に興味をもち、学校で本格的に勉強してから、とても歴史が好きになりました。今回、地元の歴史をこんなに深く勉強できて本当によかったです。このような唐津の歴史を、もっとたくさんの人に知ってもらいたいと思います。

見事に積み上げた名護屋城の石垣

名護屋城博物館に展示されている名護屋城の模型

名護屋城跡からの眺望。左から松島、加唐島

「Dr. コトー来て～」島の医療について

古川直希

Teens KARATSU♣D班

ドクターが来ない！

唐津には7つの島があり、そのうち5つの島には診療所がありますが、松島、向島（むくしま）はお医者さんが通ってきます。現在佐賀県では、高島・神集島（かしわじま）について診療体制のあり方を検討しているそうです。

島に本土の人が来ることは、新しい情報が入って来ることになり、島民にとってよい刺激だといいます。例えば、小中学校がなくなると本土から先生が来なくなり、新しい情報が入ってこなくて寂しいと聞きました。

また、診療所は島の人たちの交流の場にもなっています。現在、島にいるお医者さんは県の命令で来ていて、島の医療に関わることを望んで来ているとは限りません。また、島のお医者さんが怪我などで長期的に休診せざるを得なくなった場合、代わりのお医者さんがすぐ来る体制が整っていません。

そうした背景には、離島へ望んで来るお医者さんが少ないことがあります。多くのお医者さんは都会に行きたがるようです。なぜ都会へ行きたがるかというと、都会では多くの手術を経験したり、最先端の医療技術を学べるからです。みんなが「都会に出たい」と思ってしまったら、将来、島のお医者さんがいなくなってしまう可能性もあります。本当に皆が都会に出たいのでしょうか。

お医者さんの不安と悩み

赴任して来たお医者さんにとって困ることは、自分の専門外の診断が難しいことです。「わからなかった場合に、わざわざ本土にまで行って診断してもらった方がいいかどうかの判断に悩むことがある」と加唐（かから）島の嬉野（うれの）博志先生から聞きました。

お医者さんの立場から見た島のいいところは、新しく入れる薬を自分で決めることができることで、複雑な手続きが要らないことで小回りが利きます。実際、僕が急に診療所を訪ねたにもかかわらず、生まれて初めてエコー検査をしてくれました！　また、島の人びとの暮らしや状態をじっくり眺めながら診察することができ、一人ひとりと向きあう時間がとれるなど、都会と違った形で勉強になるところもあります。

加唐島に向かう船

加唐島の町並み

加唐島に到着した診療所への船便

お医者さん募集の妙案

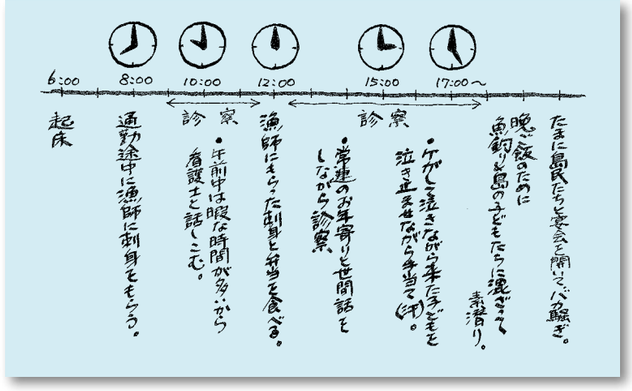
「開業するには地域医療に3年間かかわらないといけない」などの法律をつくるのもひとつの手ですが、僕の意見としては、法律で縛ると嫌々行くことになると思うので、自分から進んで島に行ってくれるお医者さんを派遣するような仕組みが必要だと思います。その仕組みについていくつか提案します。

①お爺ちゃんお医者さんに診療所をやってもらう。

第一線で働き続けてきたお医者さんも高齢になると、都会のセカセカした暮らしよりもノンビリした暮らしがよくなる人もいるでしょう。そういった人たちに島に住んでもらって診療所もやってもらえるといいと思います。

加唐島診療所

エコーで診断を受ける古川くん



20 年後の加唐島のお医者さんの一日（古川案）

②医大生に島のことを知ってもらう。

島に来るお医者さんは、慣れない場所でいきなり暮らすのは不安だと思います。そういった問題を解決するために、医大の研修の中に島の診療所に短期間勤務して、学校で勉強するだけでは学べない医療の現場や島の暮らしを経験してもらうプログラムを組んで、将来、島でお医者さんをやってもいいと思う人を育てます。

③「行きたい！」と言ってくれる人を募集する。

現在、島の魅力を知らされないまま、県の命令でとにかく行けと言われて来ているお医者さんが多いようです。それがお医者さんの不安につながっていると思うので、県の命令で行くのではなく、募集で進んで島でお医者さんをやる人を探す制度の方がよいと思います。さらに、いきなり数年単位の契約で働くのではなくて、お試し期間として短期間島での暮らしを経験してもらい、「島でお医者さんをやるのもいい！」と思った人にやってもらいます。

緊急時の船の利用料について

現在、急患が発生した場合、本土では救急車、島では船やヘリコプターで搬送されることになっています。唐津のまちなかに住んでいる僕は、もちろん無料で救急車を利用しますが、島では違います。搬送する際に船の使用料がかかります。市役所に申請すれば半額は補助されるそうですが、本土は無料で島民はお金を払うのはおかしいと思います。本土も島も関係なく無料にするべきだと思いました。

私と島の人の暮らし

山本利海

Teens KARATSU♣D班

定期船をもっと使いやすく

今、島と呼子や唐津を結ぶ手段は船しかありません。そして島の人たちは観光客と同じ定期船の料金を払っています。加唐島の場合大人は片道５００円なので、往復したら１０００円になってしまいます。だから、島の人たちは本土に来たら散髪したり、島にはないお肉などをまとめて買って、１回でたくさんの用事をすませます。

そこで私は、島の人だけの特別な定期船割引制度があったらいいのではないかと考えました。島には入院する場所がなく、診療所で治療ができないぐらい重病の人は島から出て、入院しないといけません。そうすると、お見舞いに行くのもお金がかかってしまうので、たくさん会いに行けません。島には自然などよいところもたくさんあるけど、交通の面では不便なところもあります。時々遊びに来る観光客と島に住んでいる人にとっての定期船は違うと思います。だから、定期船割引制度が実行されて、定期船が島の人たちにとって、もっと使いやすくなればいいなと思います。

離島航路には、人も荷物も乗っている

加唐島へ向かう海には漁船が出ていた

朝市が出張！船の中はお店が並ぶ

将来、朝市の人や若い人が島の港に留めた船で、お肉や島で作られていない野菜、洋服や本（マンガ）、ゲームなどを移動販売すれば、島の人が便利になると思います。１日で唐津の７つの島を回るのは大変なので、回る島を２つに分けて、２日に１回行くようにします。順番を決めると最後の島の人は、いつも残り物ばかりだと嫌だと思うので、島を回る順番を日替わりにしたらいいと思います。

売る形式はいろんな島を回るごとに、並べて戻すのは大変だと思うから、船の中がいろんな物を売っている小さいお店になればいいと思います。洋服のコーディネートのこと、オススメ本のこと、食べ物のことなど、違う種類の専門知識をもった人がそれぞれの船にいてほしいです。呼子の朝市は商品を作った人が直接売っているのがいいところだと思います。同じように、お肉なら佐賀牛を売っている人がいたり、野菜なら農家の人が売っているというようになればいいと思います。また、洋服ならスタイリストさんやデザイナーさんがいるセレクトショップ、本に詳しい人がいる本屋さんなど、さまざまな「船の店」が並ぶ港で、移動販売ができたらいいなと思います。

唐津の子どもが島の子体験

離島の子どもたちは、素潜りをして魚や貝を採ったり、７つの島の中の加唐島は韓国と交流もしているそうです。島の人や子どもたちはゆっくり、のびのび、とても楽しく暮らしています。そこで思ったのが、韓国の子どもたちは島のよさを知っているのに、唐津のまちなかに住んでいる私たちが知らないなんておかしい！ということです。そこで、「島の子体験」を思いつきました。

加唐島に到着。右手は松島中学校と統合された加唐小中学校

島では年々人口が減ってきています。孫と離れてしまったおじいちゃんやおばあちゃんもいます。そのおじいちゃん・おばあちゃんは寂しいと思います。でも、ホームステイなどで島に来た子どもたちが、おじいちゃんやおばあちゃんの寂しさを和らげてくれたらいいなと思いました。

船の上に並んだ上場台地の農作物（イメージ写真）

私は島に行ってみて、自然が多くて、人の手が加えられていないのがいいと思いました。島の子どもたちは、学校の課外授業で、海に潜ってミナ（小さな貝）を採るなど、自然に触れています。私は唐津のまちなかに住んでいますが、島に行ってみて、まちなかで体験できないことがたくさんあるなと思いました。島の子どもたちは素潜りでウニやサザエを採ったり、放課後には釣りをしたり、卓球やバドミントンもしているそうです。放課後はずっと卓球をしているので、島の子どもたちはとても卓球が強いそうです。

私は海に潜ったことがないので、いつでも海に潜れるなんていいなあと思いました。そして、島の元気さや楽しさにとっても惹かれました。ぜひ島にホームステイに行きたいです。

船の中には、八百屋、肉屋、本屋、洋服屋などが、朝市のように店が並ぶ（イラスト／山本利海）

山里

Teens KARATSU ♠ E班

E班では唐津市の厳木（きゅうらぎ）・相知（おうち）、七山（ななやま）といった、唐津の山間地域の20年後の姿を考えました。唐津市都市計画マスタープランでは、厳木・相知地域は「松浦川・厳木川を中心とした多彩な地域資源と高速交通体系を活かした産業との調和による水と緑の郷づくり」、七山地域は「清流、温泉、樫原（かしばら）湿原などの資源を活かした都市・農山村交流の山里づくり」をまちづくりの目標として掲げています。これらの地域は、豊かな自然、観光・交流資源に恵まれている一方で、高齢化、後継者不足、森林の荒廃、林業の衰退など深刻な問題も抱えています。

中高生たちは、「若い人たちがどうしたらこの場所を訪れ、そして住むようになるのか」をテーマに、自分自身が本当に楽しいと思えることをふくらませながら、地域の将来の夢を描きました。対象が市の南部（ナン）・東部（トウ）地域ということで「ナットーチーム」とネーミングしています。「粘り強いインタビューでちょっと臭いけど美味しくて栄養がある」、そんな個性的かつ魅力的な提案をぜひご賞味ください。

取材で出会った人びと D班

水口恵司さん●呼子のイカ漁師
「いつか日本から漁業がなくなってしまうかも」と心配していました。

原美智代さん　●呼子朝市出店者
イカのことならこの人に！「イカ検定」のゴールドカード保持者です。

北川ミチコさん
●肥前町大浦のはまてん屋さん
魚のすり身をその場で揚げてくれました。おいしかった！

岩本駿晴さん夫妻
●肥前町晴気　の岩ガキ漁師
採れば採るほど魚や貝は少なくなります。だから育てています。夫婦で一緒に仕事しているそうです。

川並静夫さん●呼子の海士
20メートル、素潜りできます。ウニやサザエを採りすぎないようにしています。

城谷一さん●食堂ありの家のご主人
神奈川県からUターンして食堂を開店。モダン和風のお店です。

浦丸英視さん●郵正丸船長
馬渡島行きの船は、1本減らされるごとに、島の暮らしは不便になります。

作本直樹さん●加唐丸船長
Uターンで呼子に戻り、船舶の免許をとって船長さんになったそうです。

嬉野博志さん●加唐島診療所医師
自治医大を出て赴任。最近子どもが誕生。

吉原洋子さん●加唐島吉原商店
島で唯一の商店。島の人たちの交流の場にもなっています。

寒田宗雄さん夫妻●呼子鯨組
鯨の島・小川島と鯨の町・呼子のお話をしてくれました。

未来に残したい唐津の風景 ⑤

野も山も人の手が入れば、恵みも多く風景も美しい。
石垣に囲まれた蕨野の棚田で収穫されるお米、
鮮やかな緑が大地を覆う北波多の茶畑、
七山の観音の滝から流れる水が田畑を潤す。

七山完全復活!

吉岡和起

Teens KARATSU♠E班

七山の現状と林業

佐賀県の北部には、森林に囲まれた自然豊かな集落があります。その名も「唐津市七山(ななやま)」。その周囲を浮岳(うきだけ)などの山々に囲まれていることから七つの山、七山という名前がつきました。人口はわずか2400人程度。あたりを囲む山の針葉樹は7割ほどが杉で、残りの3割が桧で構成されています。また、土砂崩れなどの自然災害を防ぐため、針葉樹より、地面によく根を張る広葉樹へと切り替えている山もあります。そんな七山で盛んなのが林業です。唐津市の中で七山は一番林業をやっている人が多いのです。私も林業を営む家庭に生まれ、この七山の美しい自然を守っていきたいと思っています。

唐津市で一番林業の盛んなこの七山ですが、実は手入れがあまりされていない山がとても多いのです。なぜなら林業を営んでいる方は兼業で、専業で林業している人は1軒もないからです。専業の人がいない理由は、外国産の安い材木が輸入されることで国産の材木があまり売れないからです。木材があまり売れないことで、後継者も少なく、働いている方の年齢層も高いのです。つまり、農林業で生活できないから後継者ができず、過疎化につながっています。このピンチを救うべくこの問題の改善法を考えてみました。

観光農園「おいでな菜園」からみた七山の山々

ピンチ!七山を救え!

この七山にある問題点は、全国の過疎地域で共通だと言えます。まず言えるのが人口の減少と少子化です。七山では一番多い時の人口は約4000人。学校は1学年3クラスありました。しかし、今は人口が約2400人、1学年1クラス20人前後まで減少しています。これを改善するには、子どもを増やさなければいけません。しかし、一概に「子どもを増やす」と言っても、そう簡単にできることではありません。

私は、まず七山を活性化させ、七山の人が結婚した時に、唐津の中心街や他の都会に引っ越すのではなく、七山の人と結婚したからこそ「七山に住みたい」、そう思えるような環境をつくることが大事なのではないかと思っています。

確かに七山に住んでいると不便なことがたくさんあります。不便なことだらけです。しかし、私は結婚してもこの七山に住み続けたいと思っています。私が将来プロポーズする時は、こんな言葉を言いたいです。

「俺と一緒に七山に住まないか?鳥のさえずりや、困った時に助けてくれる優しい人の心っていうのは、他じゃ絶対に感じることができないと思う。俺は林業をして山を守るから、お前は森林セラピーの技を身につけて、森林のよさを広めてほしい。お前とならどんな困難にも戦っていけると思うんだ。結婚しよう」と。

救世主は「森林セラピー」!?

「七山に住みたい」と、どうやったら思ってもらえるのか。そのためには七山の象徴とも言える森林を活かした仕事を、自分たちでつくることではないかと考えました。そこで私は「森林セラピー」という仕事を、この七山で新しく始めることを提案します。

どうして森林セラピーなのかというと、現代の社会は典型的なストレス社会です。このストレスを解消するためには、七山の自然で行う森林セラピーが最適だと思うのです。森林セラピーを行うために、まずは、森林セラピストをこの七山の地で育成します。そして、そのセラピストが、七山の自然とセラピーで、都会の人の心と体を癒していきます。

しかし、1回だけのセラピーではなんの効果も現れません。なので定期的にセラピーを受けに来てもらいます。七山になん度も足を運んでもらい、「いつかそこに住んでみたい」と思ってもらいたいのです。

七山の林業に携わる人たち。
上は下草刈り、下は間伐作業

また、この七山には多くの人が訪れる一大イベントがあります。それは「国際渓流滝登りinななやま」です。今年も、日本人だけではなく、23ヵ国から多くの人が参加しました。これに便乗して、2泊3日で国際交流の場をつくろうと考えました。例えば、1日目は国際渓流滝登りに参加し、2日目に植林など、初心者でもできる林業体験をします。そして、最終日には2日間で疲れた心身を癒すために森林セラピーを実施するというプランです。そして、「七山っていいところだよなぁ。いつか住んでみたいよなぁ」と思ってもらえるようになったらうれしいです。

これから、自分たちの手でよくしていこうと改めて思いました。大切なのは「一人の百歩より百人の一歩」。

伸び盛りの若木が育つ、手入れのよい山林

あまり手入れがされていない七山の山林